

第 38 回電気通信普及財団賞 表彰者コメント ～テレコム学際研究賞～

<順不同>

※括弧内の所属は当論文賞受賞時のものです。

大畑 龍 氏（スウェーデン・カロリンスカ研究所 神経科学研究科
ポスドク研究員）

テレコム学際研究賞 入賞

「I Hear My Voice; Therefore I Spoke: The Sense of Agency Over Speech Is Enhanced by Hearing One's Own Voice」



この度は、「第 38 回電気通信普及財団賞テレコム学際研究賞」の入賞作品に我々の研究成果を選出いただき、大変光栄に存じます。著者一同を代表しまして、審査委員の皆様及び関係者の皆様に深く御礼申し上げます。

他者とコミュニケーションをとる時、当たり前ですが私たちは言葉を発します。その際、必ずしも自覚的ではないですが、他の誰でもなく自分がこの行為を行っている主体であると感じます。この感覚は行為主体感と呼ばれ、本研究で焦点を当てた自己意識の一側面です。今回の受賞論文では、発話という行為における行為主体感の特徴、具

体的には発話に伴い(他人の声ではなく)自分の音声聞こえることで、高い主体感が感じられることを明らかにしました。

コロナ禍以降、急速にオンライン会議の需要が高まりましたが、これまではいかに話し手の音声が悪化や遅延することなく伝達できるかという点に、技術的な発展を求めてきました。しかし、本研究成果は、話し手に高い主体性を感じさせることで、積極的なコミュニケーションを促すという、情報通信の発展につながる新たな視点を提供できるものだと期待しています。

今回の受賞を励みとして、心理学・神経科学だけに閉じるのではなく、情報通信への発展など学際的な視野を保ちながら、研究分野の発展に寄与できるように精進していく所存です。最後になりますが、貴財団の益々のご発展を心よりお祈り申し上げます。

竹内 孔一 氏（岡山大学 学術研究院 自然科学学域 准教授）

テレコム学際研究賞 入賞

「研究利用可能な小論文データに基づく参照文書を利用した小論文採点手法の開発」



この度は、「第 38 回電気通信普及財団賞テレコム学際研究賞」として選出していただき大変光栄に存じます。選考に携われた皆様に心より感謝申し上げます。

本論文は日本語の母語話者を対象にした採点済みの小論文データの構築と自動採点手法の考察を行ったものです。研究利用できる日本語母語話者の小論文データが見当たらなかったため模擬試験を実施して、答案を集めて採点したデータを集約しました。試験の設定や採点のためのルーブリック作成など多岐にわたる内容を共同研究者の皆様と議論できたことは異なる見方や考え方を学ぶことができとても有益でした。

集約したデータは言語資源協会から配布されているため、他の研究組織が利用して評価することが可能であることが特徴です。小論文データの公開にあたり、岡山大学の学務部をはじめ多くの方々にお世話になりました。この場を借りて御礼申し上げます。

今回の受賞を励みに、情報通信技術の更なる発展と社会実装の実現に向けて、研究を進めてまいります。最後になりますが、貴財団の益々のご発展と一層のご繁栄を祈念いたします。

佃 洗撰 氏（国立研究開発法人産業技術総合研究所 主任研究員）

テレコム学際研究賞 入賞

「Kiite Cafe: A Web Service for Getting Together Virtually to Listen to Music」



この度は、「第 38 回電気通信普及財団賞テレコム学際研究賞 入賞」という栄えある賞をいただき、光栄に存じます。受賞者を代表し、電気通信普及財団の皆様ならびに審査員の皆様に厚く御礼申し上げます。

受賞論文では、他の人と一緒に音楽を聴くことで得られる社会的価値の重要性に着目し、人々が Web 上で集まって同じ瞬間に同じ曲を聴きながら、リアルタイムにコミュニケーションが取れる Web サービスである、音楽発掘カフェ「Kiite Cafe」(<https://cafe.kiite.jp>)を提案しています。Kiite Cafe では、再生される曲が Kiite Cafe にいるいずれかのユーザの好みの曲から選択される点および、曲に対する「好き」という反応を可視化する機能を提供している点に特徴があります。1,760 名のユーザの 5 ヶ月間に渡る行動ログ(Kiite Cafe のサービス利用ログ)を分析し、これらの特徴が人々の音楽聴取行動にもたらす影響の社会調査結果を報告しています。Kiite Cafe の実現にあたり、ユーザの聴衆としての公平性とキュレータとしての公平性の両方を同時に満たすことを可能とする音楽推薦技術も研究開発しました。さらに、歌声合成ソフトウェア VOCALOID を用いた楽曲に関連する複数のオンラインイベントでも Kiite Cafe を活用し、140 名ものユーザと一緒に音楽を聴いて楽しむイベントを実現するなど、新型コロナウイルス感染症の影響で多数の人々が同じ場所に集まって音楽を楽しむことが困難な状況における、オンラインイベントの新しいあり方も示しました。

受賞にあたり、Kiite Cafe の機能を提供している音楽発掘サービス「Kiite」(<https://kiite.jp>)のユーザおよび関係者の皆さまに感謝します。また、VOCALOID 楽曲のクリエイター、そして VOCALOID 文化とそれに関連した文化を築き、支援し、楽しんでいる全ての人々に感謝します。

この受賞を励みに、人々の音楽聴取体験をより多様で豊かにする技術の発展に貢献できるよう、一層精進して参ります。

岡村 優希 氏（名古屋市立大学 人文社会学部 専任講師）

テレコム学際研究賞 奨励賞

「AI 技術と集团的労働法上の課題—集团的利益調整の位置付けと不当労働行為制度の解釈に着目して—」



この度は、「第 38 回 電気通信普及財団賞テレコム学際研究賞 奨励賞」という名誉ある賞を賜り、誠に光栄に存じます。

本研究は、第4次産業革命下での非雇用化の進展に伴い、重要性がより高まると解される集团的労働法の分野において、法解釈上、AI の社会実装がどのような影響を及ぼすのかを検討したものでございます。具体的には、現在実用化されている AI の技術的な特性を踏まえた上で、それを労働者性の有無や不当労働行為の成否を検討する際の法解釈の拠り所とした検討を行っております。

本件受賞論文の執筆に際して、同志社大学労働法研究会で研究報告の機会をいただき、ご参加の先生方・院生の方々より貴重なご意見・ご質問を頂戴しました。また、技術面の知見(及び情報通信技術で社会をより良くしようという熱意)は、別稿について行った NTT 社会情報研究所との共同研究に多くを拠っております。さらに、当時の所属先である情報通信総合研究所の同僚との日常的な会話の中から、研究上の重要なヒントを得ることも少なくありませんでした。これらのいずれが欠けていたとしても、本件受賞に至らなかったであろうことを考えると、私の受けた学恩の大きさには計り知れないものがあります。ここに、改めて感謝申し上げます。もちろん、本稿には議論の余地が残されていると思います。それはこれらの機会を十分に活かせなかった私の不徳の故であり、最新の技術動向を注視しながら、これからも検討を続けて参りたいと存じます。末筆ではございますが、貴財団の益々のご発展を心より祈念申し上げます。

片山 梨沙 氏（京都大学 大学院情報学研究科 博士後期課程 2 年）

テレコム学際研究賞 奨励賞

「Confidence modulates the decodability of scene prediction during partially-observable maze exploration in humans」



この度は、「第 38 回電気通信普及財団賞テレコム学際研究賞 奨励賞」という栄えある賞を賜り、大変光栄に存じます。電気通信普及財団の皆様、および審査いただいた先生方に厚く御礼申し上げます。また、本研究におきまして多大なるご指導をいただいた京都大学 石井信教授、オックスフォード大学研究員 吉田和子さんに心より感謝申し上げます。

受賞論文では、人間が脳内に作り出す仮想現実的な「予測」と、その予測に対する「自信の高さ」が脳活動から読み出せること、また、脳活動からの予測の再現性と自信の高さに関連があることを示しました。人間の予測、それへの内省的評価という心的世界の再現は、人間の自己意識の根源を探る端緒となりうるだけでなく、例えばドローン・車両などの移動人工物に対する人間と人工知能の協調的制御などへの応用可能性も期待できます。

今回の受賞を励みに、未だ謎の多い人間の脳情報処理過程の解明と、それによる社会経済への貢献を目指して、今後より一層精進して参ります。末筆ではございますが、貴財団の益々のご発展を心より祈念申し上げます。

越前 功 氏（国立情報学研究所 情報社会相関研究系 教授）

テレコム学際研究賞 特例表彰

「特集「インフォデミック時代の AI とサイバーセキュリティ」」



この度は、「第 38 回電気通信普及財団賞テレコム学際研究賞 特例表彰」を賜り、大変光栄に存じます。審査員の先生方、ならびに電気通信普及財団の関係の皆様方に厚く御礼申し上げます。「特集『インフォデミック時代の AI とサイバーセキュリティ』」では、JST CREST「インフォデミックを克服するソーシャル情報基盤技術」（研究領域：信頼される AI システムを支える基盤技術）の研究成果をまとめたものです。

AI により生成されたフェイクメディアがもたらす脅威は今、我々のすぐ隣にあります。この中で、種々のコミュニケーションや意思決定をさまざまな面から支援する仕組み作りは、多くの研究分野をまたぐ学際研究の大きな流れになるとともに、情報基盤が当然のように備えるべき新しいインフラになり得ると考えています。本特集では、フェイクメディアに対する技術的な対抗策に加えて、その影響が大きく表れるソーシャルメディア上での情報の流れを社会科学的に分析し、さらにはフェイクメディアの法的側面についても議論しています。我々の研究グループでは、今後もフェイクメディアの問題について様々な側面から研究を進め、広く成果を発信していきたいと考えています。

フェイクメディアは、エンターテインメント等の目的は楽しく利用できる一方、誤ったメッセージを伝えるツールとして悪用することもできます。本特集、今回の受賞を通じて、多くの人々にこのフェイクメディアの二面性を伝え、フェイクメディアのこれからのあり方を考えていただくきっかけになれば幸いです。